



平成30年度発掘調査
埋文

さかど年報



花見塚遺跡17区全景写真

坂戸市教育委員会

序 平成30年度坂戸市発掘調査概況

坂戸市は市域の大部分を平坦な台地(坂戸台地・毛呂台地)が占めており、台地の縁辺部には越辺川や高麗川などの中小河川と広大な沖積平野が広がっています。安定した台地と豊かな水源、肥沃な低地に恵まれたこの土地では、いにしえから人々の生活が営まれてきました。そのため、市内には旧石器時代から中近世に至るまでの遺跡が数多く存在しており、現在登録されている遺跡の数は152か所にも及びます。

平成30年度、坂戸市教育委員会では16件の発掘調査を実施しました。調査原因の大半は住宅の建設によるもので、そのほか店舗の建設や道路敷設に先立ち発掘調査を実施しました。また、今年度より県指定重要遺跡である古代寺院跡「勝呂虎寺」の範囲内容確認調査を、駒澤大学と合同で実施しました。

時代	できごと	30年度調査遺跡	
旧石器	約3万5千年前 約1万5千年前 約1万2千年前	大陸から日本列島に人が渡ってくる 中小坂・横沼地区で石器出土 土器・弓矢の使用 坂戸市域で最古の土器出土	
	縄文	坂戸市域の各所で集落が営まれる 大家地区で多彩な耳飾り出土	★長岡遺跡18区 (縄文時代中期～平安時代)
弥生	約2,300年前 (諸説あり)	稲作の伝来、鉄器の使用 青銅器(銅鐸など)の使用	
	約1,750年前	墳丘墓の出現 前方後円墳の出現	★終遺跡9区(弥生時代中期～後期) ★上谷遺跡15区(古墳時代前期) ★宮裏遺跡32区(古墳時代前期)
古墳	須恵器生産の開始	大化の改新 若葉駅周辺に大規模集落出現 和銅開珎铸造	★宮ノ前遺跡13区(古墳時代中期～中近世) ★新田前遺跡12区(古墳時代中期～平安時代) ★西浦遺跡40区(古墳時代後期～中近世) ★稲荷森遺跡9区(古墳時代終末期)
	約1,300年前	平安京遷都	★勝呂虎寺G地区(古墳時代終末期～平安時代) ★花影遺跡29区(奈良時代～平安時代) ★前林遺跡7区(古墳時代～平安時代) ★中原遺跡15区(古墳時代～奈良時代)
奈良	約1,200年前	平将門の乱 壇ノ浦の戦い 鎌倉幕府の成立	★一天狗遺跡2区(平安時代) ★坂戸神社遺跡4区(平安時代) ★花見塚遺跡17・18区(古墳時代～中近世)
平安	約800年前	入西地区や勝呂地区で武士が活躍	
鎌倉			

調査理由 店舗建設
 調査期間 平成30年4月20日～5月25日
 調査面積 101㎡
 検出遺構 竪穴住居跡1軒(古墳時代前期)



上谷遺跡は東坂戸団地の北側、谷治川を望む台地上に位置する遺跡です。今回の調査で発見された住居跡は一边が約8m、床面までの深さは約60cmを測り、比較的大型な住居跡と言えます。主柱穴は、東側で2本検出され、調査区外に存在していると推定される西側2本とともに4本で屋根を支えていたと考えられます。南壁付近では出入り口としてはしごを設置していたと思われる柱穴や、器物を収納するための施設である貯蔵穴ちよぞかけつとみられる土坑が確認されており、住居跡中央部では炉跡も複数確認されています。

出土遺物は土師器の破片が大半でしたが、床面付近からは装飾品として用いられたガラス製の小玉が1点出土しています。

上谷遺跡ではこれまでに古墳時代前期の住居跡が点々と発見されていますが、これほど大型住居跡の発見例はなく、集落内における特殊な建物であったと考えられます。



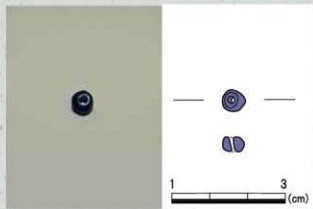
調査区全景(北から撮影)
 南北辺は約8m。住居跡中央の窪みが炉跡。



住居跡南壁付近(北から撮影)
 貯蔵穴と出入り口ピットと思われる柱穴が複数確認できる。



炉跡(赤線内側)
 炉跡は使用時の熱によって赤褐色に変色している。



出土したガラス玉(大きさはほぼ実寸大)
 紐に通すことで首飾りなどの装飾品として用いられた。

調査理由	建売住宅建設
調査期間	平成30年6月4日～7月6日
調査面積	357㎡
検出遺構	竪穴住居跡2軒(弥生時代後期) 方形周溝墓2基(古墳時代前期)



宮裏遺跡は坂戸市中央部の台地上に位置し、遺跡の西側には高麗川の低地帯が広がります。遺跡内には古墳時代前期の方形周溝墓群をはじめ多くの遺構が分布しています。今回の調査では住居跡2軒、方形周溝墓2基が発見されました。

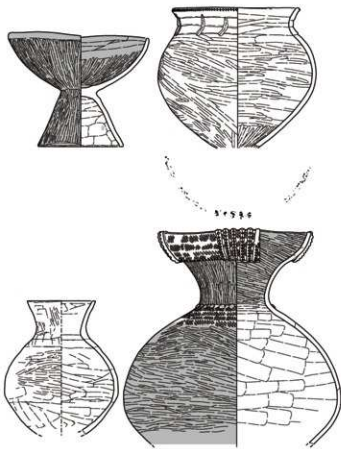
1号住居跡は、弥生時代後期の住居跡で、一边は約4mを測ります。床面付近から、ほぼ完形の土師器はじきの壺や高坏がまとめて出土しており、当時の土器様相を示す良好な一括資料の発見となりました。また今回発見された土器群を見ると、千葉県や東京湾岸など南関東で出土する土器と類似した特徴をもつものが含まれていました。詳細は今後の研究課題となりますが、この遺跡に住んでいた人々と南関東の人々との間には活発な交流があったのかもしれませんが。



1号住居跡全景(北から撮影)
遺物は南西コーナー付近に集中している。



遺物出土状況(北から撮影)
遺物はほぼ正位を保っており、床面直上から出土した。



1号住居跡出土遺物(S=1/5)
南関東で見られる特徴を持つ土器が含まれている



1号方形周溝墓（南から撮影）

方形周溝墓は北側の周溝の一部を除くほぼ全面が調査対象となった。周溝はほぼ正方形で全周しており、幅約2m、深さは約0.6mを測る。

方台部には弥生時代後期の住居跡が見えるが、方形周溝墓の周溝によって一部が壊されている。

ほふけいしゅうこうぼ

32区では2基の方形周溝墓が確認されています。1号方形周溝墓は、一辺約14m、周溝幅は2mを測り、宮裏遺跡内で確認されている方形周溝墓の中では比較的大型のものになります。埋葬施設がある方台部の盛土については、削平により消滅していました。

周溝の北西コーナーと南側付近からは土師器の壺が出土しています。これは方台部上に置かれていたものが、歳月の中で周溝内に落下したものとみられます。

今回の調査区では、弥生時代後期の竪穴住居跡と、それに続く古墳時代前期の方形周溝墓という、異なった性質を持つ遺構が重なるように発見されました。このことから、時間の経過とともに、この場所が集落域から墓域へと変化したことがうかがわれます。



周溝北西コーナー付近遺物出土状況



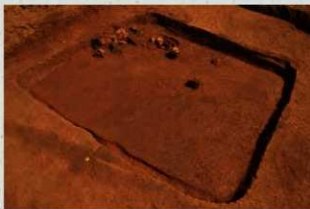
周溝南側付近遺物出土状況

調査理由 個人住宅建設
 調査期間 平成30年6月21日～7月18日
 調査面積 61㎡
 検出遺構 竪穴住居跡1軒 (古墳時代後期)
 土坑1基 (時期不明)



稲荷森遺跡は坂戸市の西部、毛呂台地上に位置する遺跡です。今回検出された1号住居跡は一边が約3.6mの隅丸方形で、東側にはカマドが敷設されています。カマドの周辺や貯蔵穴の中からは多数の遺物が出土しました。出土遺物からこの住居跡の年代は古墳時代後期と推定されます。

この住居の特筆すべき点として、カマドの検出状況があげられます。カマドからは土師器の長胴甕が4個体まとまって出土しました。これらの甕はすべてが煮炊きで使用されたのではなく、カマドを構築する際の芯材として用いられていたことが明らかとなりました。甕は両袖に1個体ずつ、天井部に2個体使用されており、おおよそ「コの字」になるように組み込まれていたと推定されます(復元図参照)。甕を構築材に使用することで、粘土の使用量の削減や、天井の軽量化を図っていたのかもしれませんが。



住居跡全景 (北西から撮影)



貯蔵穴遺物出土状況

カマド・貯蔵穴を中心として東南部に遺物が集中している

貯蔵穴内には飯・壺・環がほぼ完形の状態で埋没していた



カマド検出状況 (西から撮影)



カマド復元図

カマド中央付近に甕2器体が横たわって出土している

カマドの芯として土師器甕が使用されている

調査理由 個人住宅建設
 調査期間 平成30年7月2日～7月19日
 調査面積 46㎡
 検出遺構 竪穴住居跡2軒（古墳時代中期・後期以降）



新田前遺跡は、坂戸台地の北東縁辺部に位置しており、明泉遺跡などの周辺遺跡と合わせて、古墳時代から古代にかけての集落遺跡が連続と続いています。

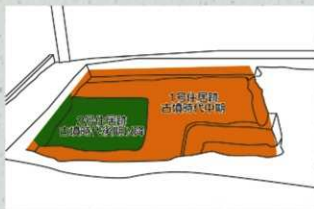
今回発見された2軒の住居跡は重なり合っており、一辺5m以上の1号住居跡の中に一辺約3mの住居跡がすっぽりと収まるような状況で発見されました。住居跡の新旧関係を確認したところ、1号住居跡の埋没後に、2号住居跡が作られていることが明らかとなりました。時期についてはいずれも古墳時代のものです。

特徴的な遺物として、1号住居跡から出土したスプーン状の土製品の破片があげられます。市内でも数例の出土事例がありますが、用途については不明です。このような土製品には実用品を模造したとみられるものが数多くあります。今回出土した土製品についても、模造品として何らかの祭祀行為で使用されていたのかもしれない。



調査区全景（北から撮影）

1号住居跡の一部は後世の掘り込みによって破壊されている。



遺構略図

1号住居跡が埋没した後に2号住居跡が作られている。



2号住居跡（西から撮影）

一辺約3mの住居跡、土師器や須恵器が出土している。



上谷遺跡出土スプーン型土製品

出土遺物

スプーン型土製品の一部分が出土した（左写真）。

調査理由 個人住宅建設
 調査期間 平成30年7月11日～8月2日
 調査面積 85㎡
 検出遺構 古墳1基 (古墳時代後期～終末期)
 溝2条 (時期不明(中近世か))



西浦遺跡がある毛呂台地東部では、古墳時代後期から終末期にかけて数多くの古墳が築造され、複数の古墳群を形成しています。西浦遺跡や中原遺跡にまたがるようにして広がる北峰古墳群では、古墳時代後期以降、帆立貝式古墳1基を含む、中小規模の円墳が数多く築造されます。これは、古墳に埋葬される人物の階層幅が広がり、前段階より多くの人

が古墳に埋葬されるようになった背景が影響していると考えられます。今回の調査では、古墳1基(北峰42号墳)の周溝の一部が発見されました。周溝の幅は約1.5mで、仮に円墳であると想定した場合直径は約9mであると推定されます。遺物が出土していないため、詳しい築造年代については不明です。

1・2号溝は、東西方向に並走するように発見されており、断面系は薬研状となっています。覆土の様子などから中近世以降開削であると推定されます。



調査区全景 (北から撮影)

写真左側に見えるのが42号墳。2条の溝は並走している。



42号墳 (南から撮影)

周溝の一部のみを確認した。周溝南側は浅く広がる。



42号墳 (西から撮影)

墳丘は道路下、周溝は向かいの畑まで延びていると思われる。



薬研型(断面形)

1号溝 (西から撮影)

やや浅いが断面形は薬研状をしている。

6 勝呂廃寺G地区（坂戸市大字石井）

調査理由 保存目的の内容確認調査
調査期間 平成30年8月6日～9月3日
調査面積 165㎡
検出遺構 竪穴住居跡
土坑・ピット
溝等を確認



勝呂廃寺は、谷治川と越辺川低地帯に挟まれた馬の背状の台地上を寺域としていた古代寺院です。これまでの調査では、廂を有する大型掘立柱建物跡や、基壇などの特殊な遺構や、大量の瓦、塔の上部に用いられた装飾具「相輪」の一部とみられる青銅製品、「寺」の字が書かれた墨書土器といった寺院の存在をうかがわせる発見が多数ありました。今年度は遺跡の保存を目的とした内容確認調査を駒澤大学と合同で実施しました。

今回調査したG地区はC地区とE地区に挟まれており、両調査区で確認されていた大溝の他、住居跡などの遺構を複数確認しました。大溝は遺跡の南端部を東西方向に走行しており、寺域の南側を区画していたと思われます。溝の中からは、大量の瓦の他、馬の骨や瓦塔(陶製の塔)の一部、須恵器などといった多種多様な遺物が出土しました。今回の調査の結果、大溝の開削時期は7世紀中ごろ以降であることが明らかとなりました。



7世紀の竪穴住居跡

遺構確認状況（東から撮影）

幅約2.5mの東西方向の大溝が確認された。



完掘状況（西から撮影）

大溝の深さは約1.2mで、覆土の中層からは瓦や瓦塔などが発見された。



大溝遺物出土状況（平成9年度調査）

今回の調査区の東側で確認された。瓦が大量に出土している。

調査理由 集合住宅建設
 調査期間 平成30年8月9日～9月14日
 調査面積 175㎡
 検出遺構 竪穴住居跡6軒（古墳時代中期・後期）
 土坑2基、ピット1基（時期不明、中世以降）
 溝5条（中世以降）



宮ノ前遺跡は坂戸市中央部の台地縁辺部に位置し、近年土地区画整理事業が行われている片柳地区にある遺跡です。

今回の調査では、古墳時代の住居跡が多数発見されました。住居跡は調査区の西側で集中的に発見されており、カマドや貯蔵穴ちよぞうけつの中からは土師器はじぎや須恵器すえきなどの遺物が多数発見されました。大半の住居跡は時期差がそれほどなく、古墳時代中期から後期に位置づけられることから、当該期にこの地で集落が連続と営まれていたことを物語っています。

溝は5条確認されていますが、いずれも東西方向に走行しており、断面形は逆台形をしています。溝の用途については不明ですが、開削された時期はいずれも中・近世であると考えられます。



2号住居跡（西から撮影）

住居跡のおおよそ半分が1号土坑によって壊されている。



3号住居跡（東から撮影）

複数の住居跡や溝が複雑に重複している。



1号土坑（北から撮影）

大型の土坑で壁面には横穴が掘られている。中世以降のものと思われる。



溝群（西から撮影）

溝はいずれも東西方向に走っている。

調査理由 建売住宅建設
 調査期間 平成30年8月9日～9月25日
 調査面積 117㎡
 検出遺構 竪穴住居跡3軒 (奈良・平安時代)
 土坑17基、ビット2基 (奈良・平安時代以降)
 井戸1基 (奈良時代)



花影遺跡は坂戸市中央部に広がる遺跡です。現在遺跡の大半は宅地化されており、古代の姿をうかがい知ることは難しくなっていますが、畑地や住宅の下には、今もなお多くの埋蔵文化財が眠っています。

今回の調査では奈良・平安時代の集落の一端が明らかとなりました。1号住居跡は奈良時代(8世紀前半)の住居跡で、中央部には小型の炉とみられる被熱面が検出されました。鎌や刀子、釘とみられる鉄製品が複数出土していることから、この住居内で鉄製品の加工等が行われていた可能性もあります。

3号住居跡は平安時代(9世紀後半)のものともみられ、灰釉陶器や須恵器などの遺物が複数出土しました。カマドは東側に敷設されており、カマドの煙突部分には土師器の甕が転用されていました。



調査区全景 (南から撮影)

住居跡(赤)や井戸跡(黄)が密集して発見された。



1号住居跡 (西から撮影)

住居内からは鉄製品のほか土師器や須恵器が出土した。



3号住居跡 (西から撮影)



カマド (西から撮影)

1号住居跡に比べて掘り込みは浅い。他の遺構に切られている。煙突部分に土師器の甕が口を下にした状態で設置されている。

調査理由	道路敷設
調査期間	平成30年9月25日～10月29日
調査面積	119㎡
検出遺構	掘立柱建物跡2棟 (平安時代) 溝4条 (平安時代・中世) 井戸1基 (平安時代) ピット10基 (奈良・平安時代以降)



坂戸神社遺跡は坂戸駅の西側、坂戸神社を中心として市街地内に広がる遺跡です。

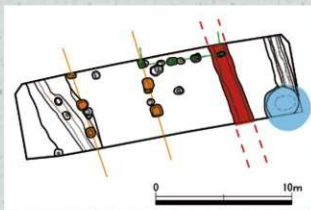
1号掘立柱建物跡は、調査区内において隅丸方形の柱穴が5基 (南北推定2間、東西は2間以上) 確認されました。柱穴を半分だけ掘って断面を観察すると、柱を据えたのちに、周囲を黒褐色土と黄褐色土で互層に締め固めている様子が確認できました。柱穴から出土した遺物から建物跡の年代は平安時代と推定されます。

また、2号溝は、掘立柱建物跡の軸とおおむね一致していることから、ほぼ同時期に区画溝として機能していた可能性があります。現段階では不明な点が多く残っていますが、今後周辺における調査事例の増加によって区画の規模や性格などが明らかになるかもしれません。



調査区全景 (空中写真撮影)

柱穴が規則的に並んでいるのが見える。(黄色：1号掘立柱建物跡 緑：2号掘立柱建物跡 赤：2号溝 青：1号井戸)



1号掘立柱建物跡の柱穴断面

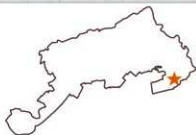
柱の周りを2種類の土で締め固めているのが確認できる。



1号溝と1号井戸 (西から撮影)

1号溝は中世以降の掘削とみられる。

調査理由 個人住宅建設
 調査期間 平成30年9月28日～11月5日
 調査面積 117㎡
 検出遺構 竪穴住居跡4軒 (古墳時代後期・奈良・平安時代)
 土坑4基、ピット3基 (時期不明)
 土器集積遺構1基 (古墳時代中期)



前林遺跡は坂戸市東部に位置し、上谷遺跡と隣接しています。今回の調査では調査区の北側に集中して4軒の住居跡が検出されました。

2号住居跡は多量の遺物が出土しており、出土遺物の特徴から、住居跡の年代は奈良時代(8世紀初頭)とみられます。奈良時代に入ると、生活で使用される器の主体が土師器はじぎ主体から須恵器すえぎへと移行していきませんが、この住居跡では土師器の出土量が須恵器を圧倒していました。

過去の調査成果をみると、前林遺跡や隣接する上谷遺跡周辺では粘土採掘の痕跡や土師器に赤彩を施すための顔料などが発見されており、古墳時代から継続的に土師器の生産が行われていた可能性が指摘されています。土師器の生産は奈良時代まで継続していた可能性があり、今回の発見はその裏付けとなるかもしれません。



2号住居跡

住居跡内からは大量の遺物が出土した。



2号住居跡出土遺物

大半の遺物は土師器で、細かい破片も含めるとかなりの量になる。



2号住居跡出土遺物

接合を終えたもの。器種は坏が多くを占める。



1号住居跡出土遺物

1号住居跡は平安時代のものとみられ、須恵器の小型の短頸壺が出土した。底部は意図的に穿孔されている。

調査理由 個人住宅建設
 調査期間 平成30年10月2日～10月18日
 調査面積 51㎡
 検出遺構 溝1条 (古墳の周溝か)



中原遺跡は、前述の西浦遺跡と隣接しており、北峰古墳群が展開しています。今回の調査では溝1条が検出されました。

この溝は緩やかな弧を描いており、溝の断面形状や堆積した土層の状況から、古墳の周溝の一部とも考えられます。検出された溝の幅は約3.4mで、やや不規則な形をしています。帆立貝式古墳ほたてがひしきこらんの前方部である可能性もありますが、周溝が浅く、上層は耕作によるかく乱を受けているため確かではありません。

溝の南東側では遺物が集中して出土しました。器種や個体数が不明なほど細かい破片となっていました。ほぼすべての破片が接合し、須恵器の横瓶1個体と環5個体になりました。遺物の年代は奈良時代やしろじだいのものと考えられます。

祖先の眠る古墳を前に祭祀行為が行われたのかもしれない。



1号溝 (西から撮影)
 古墳の周溝 (南東側) の可能性がある。



遺物集出土状況 (北から撮影)
 溝の中層からまとまって出土した。



出土した横瓶よこび
 酒や水などを入れる容器といわれる。



出土した環
 細かい破片となっていたがほぼすべてが接合した。

調査理由 個人住宅建設
 調査期間 平成30年10月29日～11月20日
 調査面積 50㎡
 検出遺構 竪穴住居跡1軒(平安時代)



一天狗遺跡は坂戸駅の南側に位置し、坂戸市と鶴ヶ島市にまたがる遺跡です。周辺には奈良・平安時代の集落を主体とした遺跡が広範囲に広がっています。

1号住居跡は一边が約4.5mの隅丸正方形で、カマドが北壁と東壁で検出されました。2つのカマドを比べると、北カマドは袖の痕跡がなく、東カマドには袖が残っていました。このことから、2つのカマドは同時に使用していたわけではなく、北から東への作り替えが行われたとみられます。東カマドは比較的大型で、煙道部には構築材として板石状の片岩へんせつが用いられています。カマドの北半部は板石や壘の破片が散乱し、袖の残存状況も良好ではありませんでした。片袖が壊れている事例は各地でみられることから、カマドの使用を終える際に、破壊を伴う祭祀行為が行われていたのかもしれない。

出土遺物からこの住居跡の年代は平安時代(9世紀中頃から後半)とみられます。



調査区南側全景写真(西から撮影)

住居内からは土師器や須恵器、灰釉陶器などが発見された。



1号住居跡出土遺物

住居の床面付近に堆積した焼土の中から鉄釘が出土した。



東カマド(西から撮影)

カマドの南半部(右側)には袖の粘土や板石がきれいに残っている。



北カマド(南から撮影)

袖の構築材など、壁面からはみ出した部分にカマドの痕跡が残っていない。

調査理由 個人住宅建設
 調査期間 平成31年1月21日～1月30日
 調査面積 103㎡
 検出遺構 遺物包含層 (縄文・弥生・奈良・平安時代)



柗遺跡は坂戸台地縁辺部に位置し、遺跡の東側には谷治川によって開析された谷地が広がります。遺跡範囲の中央を占める台地頂部の平坦面には、弥生時代の集落域と墓域が展開しています。

今回の調査区は台地頂部から谷地に向かう緩斜面に位置しており、弥生時代の遺物を主体とした遺物包含層を確認しました。遺物包含層とは土器などの遺物を含んだ土層のことで、台地上から谷地に向かって流れ込む土砂の堆積や、人為的な遺物の廃棄などによって形成されます。今回検出した遺物包含層の厚さは約25cmで、包含層の上層から順に奈良・平安時代、弥生時代中期・後期、縄文時代中期の遺物が出土しました。出土遺物は弥生時代のものが最も多く、岩鼻式土器 (弥生時代後期) の破片が多数出土しました。



包含層遺物出土状況

弥生時代の遺物を中心に多数の遺物が出土した。



作業風景

土を段階的に掘り下げ、遺物出土位置を記録していく。



岩鼻式土器 (弥生時代後期)

柗遺跡2区 (昭和63年調査) 出土弥生土器
 籬状文や櫛書き波状文といった文様が施文される。



出土遺物

大半は破片だが、多種多様な文様が確認できる。

14 花見塚遺跡17・18区 (坂戸市大字小山字北林)

調査理由 個人住宅建設

調査期間 17区：平成30年4月19日～6月7日
18区：平成31年1月23日～2月21日

調査面積 17区：173㎡ 18区：140㎡

検出遺構 竪穴住居跡6軒（古墳時代・奈良・平安時代）

掘立柱建物跡5棟（時期不明）

土坑24基、ピット35基、溝7条（古墳時代～近世）



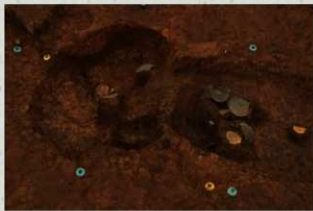
花見塚遺跡は坂戸市西部の毛呂台地上に位置しています。今回の調査では古墳時代から中・近世までの遺構が多数発見されました。

17区の4・5号土坑からは平安時代の須恵器すえぎがまとめて出土しました。須恵器の入っていた土坑は激しく熱を受けており、何かを焼成した遺構いこうと考えられます。焼成遺構の用途や目的は不明で、須恵器が一括で投棄されていたこと含めて検討すべき課題の多い発見となりました。

18区の1号住居跡は、出土遺物から平安時代の住居跡と推定されます。住居跡の平面形は長方形を呈しており、カマドは確認できませんでしたが、床に2基の炉が検出されました。このことから、この建物は居住用ではなく、工房のような性格をもった建物だったのかもしれませんが。



17区全景写真（空中写真撮影）
多数の遺構が発見された。



4・9号土坑（北から撮影）
須恵器の坏や皿がまとめて出土した。土坑の壁面は被熱している。



18区全景写真（南から撮影）
竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多数発見された。



1号住居跡（南から撮影）
中央と東壁付近に炉とみられる被熱面が確認できる。

調査理由 個人住宅建設
 調査期間 平成31年2月19日～4月18日
 調査面積 308㎡
 検出遺構 竪穴住居跡7軒(縄文、古墳、奈良・平安時代)
 掘立柱建物跡2棟(奈良・平安時代以降)
 土坑6基、ピット群(古墳時代以降)
 溝2条(奈良・平安時代以降)



長岡遺跡は、北と西側に越辺川の低地帯を臨む台地上に位置する遺跡で、その好立地から、さまざまな時代の遺構が濃密に分布しています。18区では、縄文時代中期、古墳時代後期、奈良・平安時代の遺構が多数検出されました。

2号住居跡は古墳時代終末期の住居跡で、南壁にカマドが敷設されています。カマドは両袖と天井部に構築材として板石状の片岩が利用されていました。この石材は遺跡付近では入手することができず、遠隔地から運んで来たものを使用していると思われます。長岡遺跡ではこのようなカマドが複数確認されており、遠隔地から石材を入手することが可能な集落であったことがうかがえます。

6号住居跡は縄文時代中期の住居跡で、残存状況は良好とはいえませんが、中央付近で検出された炉には深鉢が埋設されていました。このような炉は、埋壺炉と呼ばれます。



調査区南側全景写真(北から)

複数の住居跡を切るように溝が南北方向に走行する。



2号住居跡(北から)

南側のカマドには板石状の片岩が用いられている。



1号掘立柱建物跡(南から)

東西2間(4.5m)×南北3間(8m)の規模で、出土物から平安時代のものとみられる。



6号住居跡(破線部)

中央部の炉には深鉢が埋設されていた(左写真)。



平成30年1月、坂戸市浅羽地内において1点の板碑が地中から姿を現しました。農作業中に不時発見されたその板碑は、一部が欠損しているもののほぼ完全な状態でした。

板碑とは板石塔婆とも呼ばれる石碑の一種で、主に供養塔として使用されました。鎌倉時代から戦国時代にかけて全国で数多く造立されており、中世の人々の信仰や宗教観を研究するうえで重要な手掛かりとなっています。

今回発見された板碑には、仏の姿を表す梵字といわれる文字が3つ刻まれており、これらは阿弥陀三尊を意味しています。また板碑には「正安三年八月日」（紀年銘）「妙心禅尼」（人名。禅尼は出家した女性が名乗る）「逆修」（生前に自身の死後の冥福を願って行う仏事）と刻まれています。

刻まれた文字から、この板碑は鎌倉時代に妙心禅尼という女性が、死後に自分や家族が極楽浄土に行けるようにと願って建てたものと考えられます。

用語解説

●土師器（はじき）

古墳時代から古代にかけてつくられた素焼きの焼き物。赤褐色や黄色系の色をしておりやや軟質である。

●須恵器（すえき）

古墳時代以降、朝鮮半島から伝わった「ロクロ」「窯」の技術によって作られた焼き物。灰色や青灰色で土師器に比べ硬質である。

●方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）

弥生時代から古墳時代前期にかけて作られた墓の形式。やや盛り上がった方台部には埋葬施設があり、周囲は溝で囲まれている。

